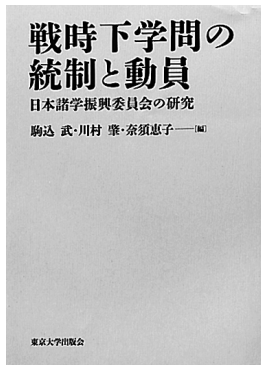


「研究の場」「学びの場」をめぐって

友野清文

1 「日本諸学振興委員会」の共同研究

昨年3月に『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』（駒込武・川村肇・奈須恵子編 東京大学出版会）という本が出版された。「日本諸学振興委員会」というのは、戦時中（1936年）に文部省が設置した「学問動員」のための組織である。この研究は、日本諸学振興委員会発足の背景にあった「天皇機関説事件」に始まる「学問統制」と、日本諸学振興委員会による「学問動員」を総合的に捉えようとしたものである。



『戦時下学問の統制と動員
日本諸学振興委員会の研究』

ところでこの共同研究の基になっているのは、東京大学大学院教育学研究科の日本教育史のゼミで「近代日本教育学説史研究」をテーマとして行った研究（と言うよりも学習）である。1980年代半ばに「教育学説史研究」をテーマとした学習を行っていた大学院生たちが、その後の中断があったものの、30年近くかけて行った研究をまとめたものである。私もほんの一部であるがこの共同研究に参加することができた。

大学院時代の「学説史研究」でテーマとなったのは「学説が産み出される場」であった。研究の成果は個人やグループの論文や著作、あるいは学会発表という形で公表される。それを歴史的に追う「研究史」や「学問史」の主な対象は、何よりも出版、刊行された文献である。それに対して、当時のゼミの指導教官であった寺崎昌男先生（現・立

大学院本部調査役）は、「学説史研究」での「場」を問題にされたのであった。学説を産み出す人物（研究者）は真空の中で論文を書く訳ではなく、特定の組織（大学や学会や行政機関）の中で、一定の問題関心に導かれながら、特定の対象（オーディエンス）に向かって語るのである。そのような「場」を問題にしなければ学説を理解することはできないというのが寺崎先生の問題提起であった。

具体的には、帝国大学・私立大学・師範学校などの教育学研究の場の成立、大学での「教育学科」の設置、学会の組織化、書籍・雑誌の刊行状況、教員免許試験の内容等が取り上げられた。

その中で戦時下の学問統制と動員の組織として「日本諸学振興委員会」も検討対象の一つとなったのである。ゼミ自体では一・二回の報告で終わってしまったと思うのであるが、その後は「戦時下学説史研究会」と称する「裏ゼミ」という形で調査を続けていった。（思えば、当時の大学院では正規のゼミではない「裏ゼミ」や自主的な研究会がいろいろあった。学外からも参加者がおり、大変刺激的であった。日本教育史の裏ゼミで「くずし文字読解勉強会」というものもあった。また堀尾輝久先生の「子ども研究会」では、発達論や母子関係論を学び、宮澤康人先生の「家族史研究会」では、西欧の家族や子どもの歴史を知った。）1992年には「中間報告」を簡易製本の形でまとめたが、参加していた院生たちが大学へ就職し始めたこともあり、この研究は中断したままの状態であった。それから10年後の2002年の春、この研究を再開し最終報告をまとめようという声が挙がったのである。指導教官の寺崎先生は東京大学退官の後には立教大学へ移られて（正確には「戻られて」）おり、他のメンバーの多くは大学の教授・助教授になっていた。

結果的にはこの「再興・戦時下学説史研究会」発足からも10年の歳月が流れてしまった。編者となった中心メンバーの一人が京都にいることもあって、年数回の研究会や合宿を行いながら、内容構成や執筆分担等について議論を重ねた。また各地の大学へ赴いて資料調査も行った。

2 「研究の場」について

「再興・戦時下学説史研究会」での私自身の執筆担当部分のごくわずかであったが、それでもかなりの負担感を持っていた。途中で抜きたいと思ったこともしばしばであった。そのような私が何かを言う立場にはないのであるが、この共同研究をまとめることができたのは、編者を務めた3人の方の献身的な努力と情熱によるところが大きいと同時に、大学院時代のゼミ仲間であったということがあると感じている。おそらく大学の研究者として出会った者同士では、このような本は生まれなかったであろう。当時20歳代であったメンバーも50の声を聞くようになっていたが、それでも集まれば昔の「寺崎ゼミ」の雰囲気であった。お互いの原稿について率直な意見を交わし、内容についての議論をしている時の気分は大学院生であった。

先に述べたようにこの研究は教育学（あるいは学問）の言説が産み出される一つの「場」を対象としたものであるが、私は別の意味で「研究の場」ということを考えさせられた。

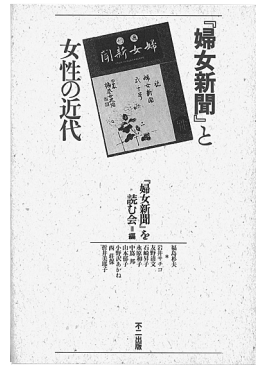
ここでいう「研究の場」とは、一つは研究会という抽象的な「場」を意味する。人間関係と言ってもよい。同じ職場でもなく、学会というフォーマルな場でもなく、直接利害関係がある訳でもない結びつきは、ある意味では弱いものである。それでもこの研究会が何とか解体しなかったのは、研究対象への興味関心にあることは言うまでもないが、それに加えて「寺崎指導生」として共有している研究への姿勢と共通の価値観によるのではないかと思う。今まではほとんど意識したことはなかったが、大学院のゼミの意義は大きかったと改めて感じた。

「研究の場」のもう一つの意味は、具体的な「場所」ということである。人が集まる場合、集まる場所が必要である。この研究会では、幸いなことに立教大学内の部屋を定期的に使うことができたので、場所を確保することで大きな問題はなかったが、合宿の場所は探す必要があった。京都では京都大学の宿泊施設を利用し、東京では私が勤務していた日本私学教育研究所の宿泊館を使ったこともあった。大学内の研究会ではこのようなことはあまり問題にならないと思うが、大学に基盤を持たない研究会にとって、「場所探し」は一つの大きな課題である。

ところで、この「場所探し」について私には別の研究会での体験がある。

3 女性史研究会

私が比較的長い期間関わったもう一つの共同研究としては『「婦女新聞」と女性の近代』（『婦女新聞』を読む会編 不二出版 1997年）がある。これは総合女性史研究会を母体とした『「婦女新聞」を読む会』によって書かれたものである。この会に私は大学院生の時（1980年代初め）に途中から参加したのであるが、当時復刻された『婦女新聞』（1900年～42年）という週刊新聞を文字通り「読んでいく」研究会であった。復刻版は大体一年分で一冊になっていたもので、毎回（二ヶ月に一度のペース）担当者を決めて一冊（一年分）を読んでいった。



『「婦女新聞」と女性の近代』

『婦女新聞』は福島四郎（1874～1945年）という人がほとんど一人で編集・発行をした新聞であった。女性の地位向上と女子教育の普及という根本的な考え方は一貫していたが、年によっての内容や論調の違いも見られて、女性を取り巻く状況の変化を直接感じることができた。また戦争については、基本的には反戦論の立場を取るのであるが、実際に開戦となると一転して主戦論となるというのも興味深いものであった。現在再読するとどうであろうかと思う。

ところで参加をしてしばらくすると、どういう訳か私か会の幹事のような役をすることになった。当時一番年下の「黒一点」で、学生の一人暮らしだったので「使いやすい」と思われたのかもしれない。幹事といってもたいしたことをする訳ではなく、毎回の案内を送ったり、欠席者に資料を送ったりという事務作業が中心であった。（もちろん当時はネットもメールもなかったので、全部郵送だった。）

その幹事の仕事を一番大変だった（というより気を遣った）のは、研究会の会場の確保であった。研究会は大体日曜日に行っていたので、私の大学（当時は大学院生であった）の教室を使うこともできず、他にも常勤で大学などにいる人

はいなかった。(当時のメンバーには大学の非常勤講師の人も少なかった。日本の女性史研究の主要な場は大学の外であったのだ。職としては中学・高校の非常勤講師や「団体職員」、少し後になると自治体の「女性史」編纂担当者などであった。余談であるが、「女性学」は当初から大学の研究者によって担われてきた。近年では大学に籍を置く女性史研究者も増えてきたが、日本での「女性史」と「女性学」が意外と遠い関係にあるのは、研究を担う人たちの置かれている状況の違いによるところが大きいと私は思っている。)

研究会の例会の会場として最初は「東京都婦人情報センター」という所を使っていた。現在の「東京ウィメンズプラザ」(渋谷区)の前身で、飯田橋のセントラルプラザ8階にあった。(当初は東京都立日比谷図書館〔現千代田区立日比谷図書文化館〕の3階に開設された。)図書室とともにいくつかの部屋があり、会合に使えるようになっていた。その後「文京区婦人センター」を利用するようになった。(1986年開館。センターの資料によると1991年に「文京区女性センター」、2002年に「文京区男女平等センター」と改称されている。「婦人→女性→男女平等」という名称の変化自体、一つの研究対象となるかもしれない。)例会の場所としては、都心などの集まりやすい所で、料金が安く、できれば図書室等が併設されている施設が望ましい訳であった。

「東京都婦人情報センター」も「文京区婦人センター」も部屋の予約は先着順であった。詳細は記憶にないが、申し込み開始は利用したい日の一ヶ月前とか、利用したい日の前の月の初日(例えば7月21日に利用する場合は、6月1日から申し込み)とかであったように思う。毎回の研究会で次回の日程を決めて、それに合わせて後日申し込みをする訳であるが、「必ず」予約しなければいけないというのは結構大きなプレッシャーであった。結果として予約できなかったことはなかったと思うが、予約を担当する人間にとっては「先着順」でなく「抽選」の方がありがたいと思っただことがある。(利用できない場合もあるかもしれないが、それは「自分の責任ではない」ということになる。)

利用料金については、文京区の方は登録団体であれば無料だった。東京都も軽減措置があったのではなかったかと思う。

またこれとは別に、この会に参加していた(当時の)若手メンバー数人との勉強会も続けていた。こちらでは基礎的な勉強を目的として、高群逸枝やエンゲルス等を読んでいた。

「女性センター」(今では「男女共同参画センター」等となっているが)の役割については様々な議論があり、国立女性教育会館の存廃まで議論されるようになった。しかし女性史を含めて大学や研究機関に基盤を持たない研究者やグループに対して、研究会などの会合の場を利用しやすい形で提供するという役割は現在でも大きいのではないかと考えている。そして個人では買えない資料を揃えるという資料室の役割もやはり重要である。いくら複製資料が刊行されても、それを気軽に利用できる環境になれば宝の持ち腐れであろう。

『「婦女新聞」を読む会』はすでに終わっているが、これを引き継いでいる「近現代女性史研究会」は現在でも例会を開いている。研究会の場所探しは今でも同様の問題があり、現在は本学の応接室をお借りしている状態である。

4 「東大・お茶大教育研究会」

大学院時代からの二つの研究会について書いてきたが、学部の子学生時代に参加していた研究会もあった。「東大・お茶大教育研究会」というもので、名前の通り、東京大学(教育学部 3・4年)とお茶の水女子大学(文教育学部教育学科 2~4年)の学生で行っていた自主的な研究会であった。(今で言えばインカレのサークルになるのかもしれないが、大学から認められている訳でも、組織がある訳でもなかった。)どうしてこの組み合わせなのかと思われるかもしれない。現にこの中から何組かの夫婦がうまれたのも事実であるが、会の活動自体はきわめてまじめなものであった。私は3年生で本郷に進学した1979年に先輩から誘われて入会した。(当時は1・2年生が駒場の一般教養課程で、3年生から本郷での専門課程であった。)研究会は一〜二週に一回あり、東大とお茶大で交互に行き来をしていた。

この研究会ではもっぱら戦後日本教育史の勉強をした。1978年に刊行された、大田堯編『戦後日本教育史』(岩波書店)をテキストにして毎回ゼミ形式で進められた。(もちろん先生はおらず、上級生が教師役だった。)少し前に刊行されていた『資料日本現代教育史』(宮原誠一他編 三省堂 1974~79年 全4巻)も3万円以上したが購入した。大学の授業以上に、こちらに力を入れて勉強したように思う。「山びこ学校」や高度経済成長期の「人的能力開発論」、あるいは民間教育研究団体の活動など初めて知る内容ばかりであったが、大変興味深かった。学年の終わりにレポート集を作った時、私が選んだテーマは「期待される人間像」

(1966年 中央教育審議会答申「別記」)であった。これを調べるために初めて国会図書館に行き、初めて国会議事録を見たのであった。(その時に「中央教育審議会」の議事録がないと知って驚いたことも覚えている。現在では文科省のHPで公開されている。)

戦後教育史に加えて読んだのは「教育実践記録」であった。当時は現場の教師による実践記録が数多く出版されていた。桐山京子『学校はぼくの生きがい』(1977年)、能重真作『ブリキの勲章』(1979年)、仲本正夫『学力への挑戦』(1979年)等が記憶に残っている。また齋藤茂男『父よ母よ!』(1979年)等のルポルタージュもよく読んでいた。

もう一つ記憶に残っているのが、当時の「新学習指導要領」についての調査である。1977年に「ゆとりと充実」を掲げた小中学校の新指導要領が発表され1980年から実施された。調査をしたのは確か1980年の夏休みだったと思うが、教育委員会や学校現場、さらには教職員組合を訪れて、新学習指導要領への対応について調べたのである。今から考えると、よくそのようなことをしたものだと思うと同時に、突然訪れた学生に対応してもらえたものだとも思うが、これも大変勉強になった。関連して読んだ『教育の森』(毎日新聞が刊行していた月刊誌)のインタビュー記事の中で当時の高村象平・中教審会長が「文部省が現場の裁量を広げようとしても、現場は戸惑ってしまい文部省に指示を求めろ。」という意味の発言をしていたのは今でも記憶に残っている。また聞き取りをしたある先生が「学校現場は新しいものが始まる前には大騒ぎをするけれど、始まってしまうと何も言わない。」と言われたことも思い返すことがある。

これらはどれも一人ではできないものであり、まだ大学の授業でも取り上げられることの少ない部分である。研究会の仲間がいたからこそできた学習であり調査であった。その意味で「教育研究会」は私の学習スタイルの基礎となっているように思う。

5 改めて「研究の場」「学びの場」ということ

一 学生たちへ伝えたいこと一

ここで紹介した研究会はいずれもインフォーマルな場であった。思い返せばこれ以外でも個人的な勉強会や研究会に参加したことがあった。

勉強や研究は基本的には一人で行う孤独な作業であることは間違いない。また大学が用意する授業その他の学習の場が基本である。しかし同時に、同じような問題関心を持

つ人間が集まり、共に学び合う場も欠かせないのではないかと思う。個人での作業を基礎として、「フォーマルな場」と「インフォーマルな場」は相互に補い合う関係にあると言える。

その場合「インフォーマルな場」を成立させ維持することは、ある意味で難しいかもしれない。「フォーマルな場」では、基本的な枠組みは参加者の外部で成り立っており、個人はその場に入ることになる。そしてその場の維持も教師や責任者が行っていく。それに対して「インフォーマルな場」は、場自体を参加者が作り上げなければならず、人間関係についてもお互いに配慮が必要である。また場の目的や方向を常に確認し、共通理解を持っていなければ、何のために一緒にいるのか分からなくなってしまうであろう。(人間関係の悪化などにより途中で空中分解した研究会もあった。)

現在私は、学生たちとこのような「インフォーマルな場」を持ちたいと考えている。教職課程には、いわゆる「ゼミ」に相当する科目はなく(「総合演習」や「教職実践演習」はあるが、これは性格が異なる。)講義だけであるので、それを補いたいという気持ちもあるのだが、それ以上に、学生にそのような場を造る力を身につけて欲しいと思うのである。

直接的な理由としては、教職に関わる学習、とりわけ教員採用試験の教職教養に関する内容は、学科の専門科目や教職課程の授業ですべてをカバーすることはできないという事情がある。どうしても自分で勉強を進めていく必要があるのだ。しかしより根本的な理由は、将来教師になった時に、必要に応じて学んでいくことができる力が不可欠と考える点にある。もちろんこれは教師に限らずどのような職業でも求められる能力であるが、とりわけ「教える」ことを仕事とする教師は、常に学び続けなければならないのである。

そのためには、職場の先輩である管理職や上司から学んだり、同僚同士で互いに学び合ったりすることが必要である。もちろん研修の場はあるが、「学びの共同体」を自分たちで作っていくことがなによりも大切であり、そのため人間関係形成力や自己学習力の基礎を学生時代に身につけて欲しいと考えている。私ができることはせいぜいそのような場を作るきっかけを与えることでしかない。後は学生たちが自分で必要や興味関心に応じて学ぶ対象を見出し、仲間と共に学び合うのを見守るだけである。既にその「芽」は出ている。これが大きな木になるのを楽しみにしている。

(ともの きよふみ 総合教育センター)